

実践報告

教職課程における実践的力を養うアクティブ・ラーニング

—全員参加の模擬授業—

Active Learning to cultivate the practical competence in teacher training

— Trial lesson of all participants —

渡辺 雅之

Masayuki WATANABE

Key words :

はじめに

本学における「教師論」は教員免許状取得のための必修科目に位置づけられ、本科目単位認定が教育実習要件となる。1年次「教育学概論1.2」、2年次「教育心理学概論」で積み上げた教育学の基礎を元にして、より実践的な力を培うことが求められている科目である。本授業においては「教科教育法」で養ってきた教科指導の力をさらに高めるべく、全員参加の模擬授業を行った。

そのキーワードがアクティブ・ラーニングである。森(2016)は最近の大学教育におけるアクティブ・ラーニングの現状を分析する中で、「最大の懸念事項は学生の学びの質の格差」であると指摘している。具体的には、フリーライダーの出現とグループワークの非活性化、思考と活動に乖離があるアクティブ・ラーニングを例としてあげている。森の指摘は、活動がアクティブに見えても学びの内実が伴っていないならば意味を持たないことの指摘である。

松下(2016)は「大学での学習は単にアクティブであるだけではなく、ディープでもあるべきだ」という主張をしている。ラーニングにあえてディープという言葉を用いている意味は外的活動における能動性を重視するあまり、内的活動における能動性がなおざりにされる批判だということ。これは森の指摘同様に、内容を伴わない活動論が意味を持たないことの示唆でもあろう。

そもそも「アクティブな性質を内包しないLearningなど存在しないのではないか(渡辺, 2016)」という議

論もあるが、溝上(2016)の定義ではアクティブ・ラーニングは、一方的な知識伝達型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のことを指す。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴うものである。

全員参加の模擬授業は、書く・話す・発表するなどの活動をメインとしたものであり、学習者自身が学習を企画しながら学習するという二重構造を持つものであり、そうした意味においてアクティブ・ラーニングの性質を強く有するものと言えるだろう。

1. 実践の概要

教師論は担当4クラス(合計132名)。内訳は、中高の国語・社会・英語の免許取得希望者である。一クラスの人数はそれぞれ、37, 27, 30, 38人と比較的相互交流や応答関係が作りやすい適正な人数となっている。教科教育法などにおいて、指導案作成や模擬授業を経験してきた学生もいるが、未経験の学生も多い。来年度に控えている教育実習に対応するという直接の目的に加え、「教えること」の実質をつかむために全員参加の模擬授業を企画した。実践は以下の流れで行った。

- ①ガイダンス「模擬授業を実施する意味と目的」
- ②学習指導案作成のための指導。資料として「教育実習の記録(中高)」「たまご先生(小学校)」などを活用¹⁾

- ③グループ編成（1グループ 5 - 6人）
- ④「場」の確保（文学部事務室の支援）
- ⑤実践（2コマ扱い）
- ⑥グループ員が授業に関するアドバイスを書いたペーパーを個人ごとにまとめて配布
- ⑦振り返り「まとめのレジメ」と総合評価²⁾

模擬授業実施のために使用したのは2コマ。グループごとに同時進行で授業を行うスタイルをとった。教師は数分ずつ巡視し、随時必要なアドバイスを行った。

授業時間は、一人20~25分→アドバイスタイム5分を基本とし、授業内容によってその時間配分をグループごとに話し合っで決定した。中には30分以上を要するものもあり、その場合はグループ内で時間調整を行った。

火曜日	多目的ホール
木曜日	321+307

同時展開のため、ホワイトボードをグループの数だけ準備配置した。設置に当たっては、空き授業の学生たちが快く協力してくれた。

2. 実践上の留意点

- ・日常の授業でグループワークを取り入れていたので基本的にはそれをそのまま活かすことにした。ただし、人数の調整から模擬授業用のグループを再編成したクラスもあった。
- ・指導案の作成にあたっては、先輩たちのものや、各都道府県などから示されている標準的なものを使用することとした。それらを元に、指導案記載の基本と注意点を指導した。
- ・授業内容は各自の取得免許に合わせたもので、やりやすいものを選択する。
- ・授業時間は20 - 25分なので、前半部、展開部、後半部のいずれかを選択する。（ほとんどは前半部であった）
- ・授業の基本スキルとして「一指示一発問」「目線（身体の向き）」「話し言葉の分節」「例示の仕方」「机間指導」「評価」など具体的なイメージをつかめるようにし、とくに「ノンバーバルコミュニケーション」が重要であることを確認した。また模擬授業そのものと同時に、共同学習として「相互評価のアドバイスタイム」を大切にすることを強調した。

3. 当日の実践

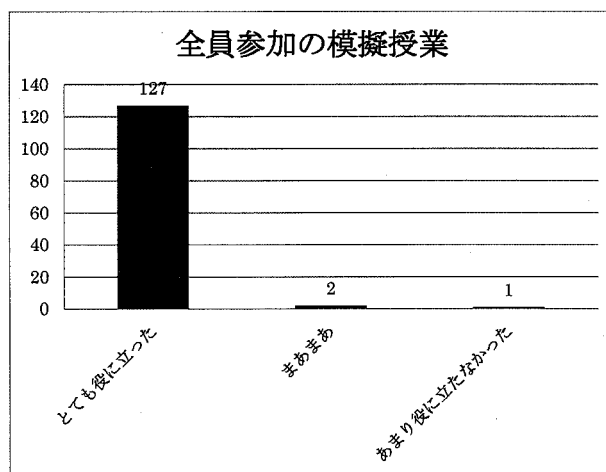
当日は各グループに分かれ、順番、タイムキーパーを自主的に決めスタートした。どの学生も準備された指導案をもとに、時間いっぱい模擬授業を展開した。教科教育法で学んだ教育技法（例えば、英語のグルグルメソッド³⁾）を活用する学生も見られ、日頃の学習の成果が反映されていた。

また、ふだんの授業では見られないコミュニケーション力を発揮する学生も多く、発問の組み立てや机間指導における声掛けなどのスキルは明日にでも教壇に立てるのではないかとはいくらかの実践力を発揮した学生もいた。

反面、教材研究が浅いため、学習内容の構成と生徒役への指示・発問がかみ合わない、準備した資料がマッチしていないなど課題が多い学生も一定数存在した。しかし、和気あいあいとした雰囲気の中で、どのグループも協力的かつ、かなりリアルに生徒役を演じたことによって、現場感覚に近い模擬授業となっていた。「先生、わかりません!」「どういう意味ですか?」などの聞き返しのタイミングなどは本番の授業さながらであった。全体を通して教師役、生徒役の双方が非常に楽しそうな雰囲気が印象的だった。

アンケート結果より

【回答総数130】



【記述表記】

<肯定的な意見>

- ・他学科の生徒もいたことでリアルな教育現場を体験できた気がする
- ・模擬授業をする機会として貴重だった
- ・実際にやっでどういう部分に気をつけなければなら

いかわかった

- ・少しの時間でもとてもよい体験になった
- ・実際の感覚がかなりつかめた
- ・来年に控えた教育実習のよい経験になった
- ・準備することの大切さを知った
- ・自分自身で分からなかった改善点に気づいた
- ・先生や班員からのフィードバックがありがたかった
- ・人前で話す難しさに気づいた
- ・イメージどおりにはいかないことが良くわかってよかった
- ・自分の授業を客観的に見てもらえてとても良かった
- ・視線、声の出し方、板書など実際にやってみないとわからないことが多かったのととても役に立った。
- ・アドバイスタイムは良かったがメッセージは無記名のほうが厳しい意見が出たかもしれない
- ・実際にやった授業は想像とはまるで違っていたので、とても役に立った。
- ・模擬授業の準備にもっと時間が必要だった
- ・模擬授業を通して、単なるプレゼンテーションとの違いは理解してもらうことに心を砕くことだとよくわかった
- ・班の人のアドバイスがとても的確で、自分では気づくことが出来なかった点ばかりでとても参考になった。また他の人の授業を観ることによって、客観的に授業を考えることで出来た。
- ・他の教職科目でも模擬授業を行ったのですが、指導する先生によって授業方針や指摘する箇所が違うことがわかりました。色々な先生からの多種多様な意見を参考に出来ることは学生にとってとても有益なことと思います。

<改善的な意見>

- ・知っている人に対しての授業だったため、緊張感に欠けた
- ・もう少し時間がほしかった
- ・他の班の声が聞こえないとありがたい
- ・黒板が全員使えるとベスト
- ・ホワイトボードが小さかった
- ・同じ班の人だと緊張感がない。
- ・ホワイトボードとペンの不備があった
- ・みんなが良い点だけ言ってくれたので、次に活かせる厳しい意見も欲しかった
- ・班の数が少し少ないのではと思った
- ・意見交換の時間がもう少し欲しかった

おわりに

アンケートに見られるように、全員参加の模擬授業はある程度、初期の目的を達成したと考えられる。ただし、準備に要する時間の確保、当日の「場」づくり（時間・空間・人員）には課題が残った。とくに同時進行のために、学生一人一人の授業内容に担当教員がコミットすることが十分出来なかった⁴⁾。

ともあれ授業実践においては「子供も先生も楽しく、疲れず『よく学べた』『うまく教えられた』という感じを持ち、先生と子供との緊密な関係が確立した、といういくつかの条件が特定の学習によって満たされていること（古藤, 2013.）」をねらわなくてはならない。また、アクティブ・ラーニングの基盤には以下の5つの要素が満たされていることが必須である。

- ①学習のねらい（目標）が「適正」なものであること
- ②学習する意味が共有化されていること
- ③学習方法が内容とその「場」に応じたものであること
- ④学習者の心理的安定が確保されていること
- ⑤学習環境（物理的なものを含む）が確保されていること

そうした意味で今回の実践は①②④に関しては、一定の担保がなされたが、③と⑤に関しては、今後検討する余地も大きい。そして、模擬授業に積極的な姿勢で臨む学生が圧倒的多数であったことから、主体的に学習する「場」をつくることの大切さを再認識することになった。本実践は、日常の授業ではなかなか見ることが出来なかったポテンシャルを引き出したとも言えるが、逆に日常における授業改善が求められているということでもあろう。

そして最も重要な気づきは、アドバイスタイムで顕著に見られた学生自身が主体となって「授業に臨む、授業に挑む、授業をつくる」大切さである。それは言うまでもなくアクティブであり、「共同で学びをつくる」ことが根幹にあった。マカレンコは「集団が個々の子どもを育てる」という集団の教育力を明らかにしたが、「子どもによる集団を醸成し（班・隊といったもの）、そこで目的を持った活動を展開し、それを成就することにより、集団を醸成する個々人が、活動の過程で成長する（川野辺・白鳥, 2013）」という集団づくりの有効性も再確認できたのである。金馬（2015）は松下佳代の議論を引用しながらインターネット時代における学校・大学の教育・学習空間を構築する上で、「情報獲得ならばネットで収集可能であり、学校・大学は、対面で他の人々と共

に学ぶことに意味がある」と言う。

学習の私事化、個別化が進む中、こうした視点を忘れずに学生と共に学び続けていきたいと思う。

※文学部事務室の岡田晶子さんには、教室や備品の確保など、条件整備に関して全面的な協力をいただいた。

この場を借りて深く感謝申し上げたい。

【巻末資料】

模擬授業をふりかえって～まとめ

渡辺雅之

2016.7.21

【英語「グルグルメソッド」を活用しての授業】

総合的評価

- ・指導案…概ねよく書けていた人が大半。ただし項目に合致してない記述あり。
 - ・準備…やっつけの人と周到な人との差があった
 - ・内容…指導書（教科書）どおりにやった人よりも、オリジナル教材や資料を準備した人の授業が良かった
 - ・当日…対話的コミュニケーションや声の大きさなど、ほとんどの人が合格点!
 - ・学習者（子ども役）&アドバイスタイムがとても良かった!
 - ・英語授業は割りと良かったが、国語は教材そのものをもっと読み込まないとダメ。また社会科は基礎知識も含めて勉強不足が目立った。
- 総体的には教材研究はまだまだ足りない。

【ノンバーバルコミュニケーションの豊かな授業】

★授業は学習内容と学習集団づくりの両輪で成り立つ!

内容に必要なのは

- ・一にも二にも教材研究の深さ…自分が面白がることからスタート! 「問い」を立てる=なぜ?を追求することが学びの基本…「なぜ●●科を学ぶのか」を含む
- ・授業の目標を明確にする（メインになる学び）
- ・目玉となるメイン教材（資料）の開発…学習者のレディネス

学習集団づくりの大切さ

- ・対話の関係性
- ・共同をつくる
- ・個別の働きかけ（励まし）

【非常に実践的なイメージのある授業】

【工夫された板書計画】

【資料「だまし絵」の提示】

【コミュニケーション力の高い指導風景】

【計画的かつ工夫された板書を書く先生役】

【生徒役が抜群のグループ】

【アドバイスタイムの和気あいあいとした雰囲気印象的】

【注】

- 1) 教育実習を終了した学生たちの記録として、指導案や振り返りシートなどが蓄積されている本学の冊子。
- 2) 巻末資料参照
- 3) 本学・静哲人教授（外国語学部英語学科）が考案した英語学習の形態。「グルグル」とは「グルグル活動」あ

- るいは「グルグルメソッド」の略で、『英語授業の心・技・体』（研究社）の中で提唱した授業内活動をさす。
- 4) それを補完する意味で、各グループごとに授業風景の写真とそれへの励ましのコメントを付けた通信を発行した。

【引用文献】

- 川野辺敏・白鳥絢也 (2013), 『教師論—共生社会に向けての教師像—』, 福村出版, pp.65-67.
- 金馬国晴. (2015), 「流行語『アクティブ・ラーニング』をどう受け止めたらいいか」, 教文館だより, 神奈川県教育文化研究所, 161号
- 古藤泰弘. (2013), 『教育学の原理と授業システムの設計』, 星槎大学院学修テキスト, p32
- 松下佳代. (2016), 松下佳代編著, 『ディープアクティブラーニング』 勁草書房, p.1, pp.18-19.
- 溝上慎一. (2016), 「アクティブラーニング論からみたディープ・アクティブラーニング」, 同書, pp.48-49.
- 森明子. (2016) 「反転授業」, 同書, pp.52-53.
- 渡辺雅之. (2016), 「『特別の教科 道徳』の背景と問題点—実践的観点からの批判と考察—」, 星槎大学院修士論文集, p56